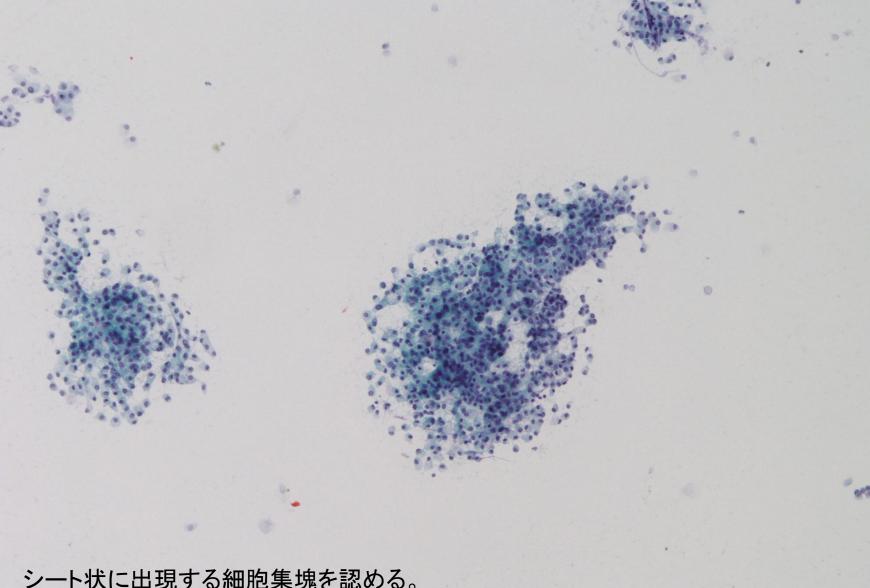
症例解説

2015.11.28

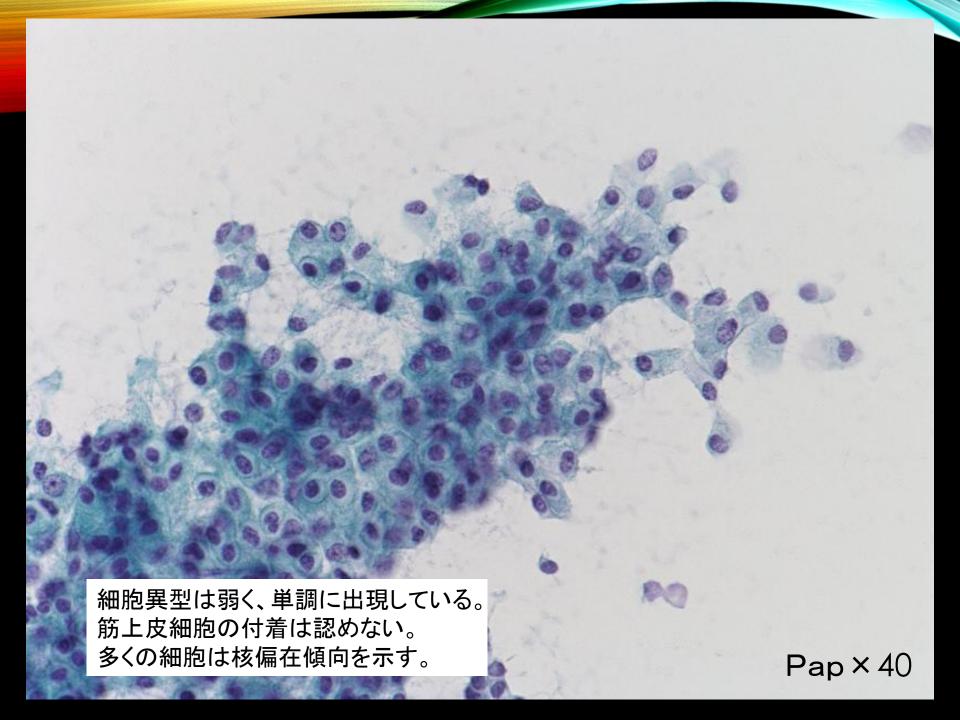
九州大学病院別府病院 阿部 有香里

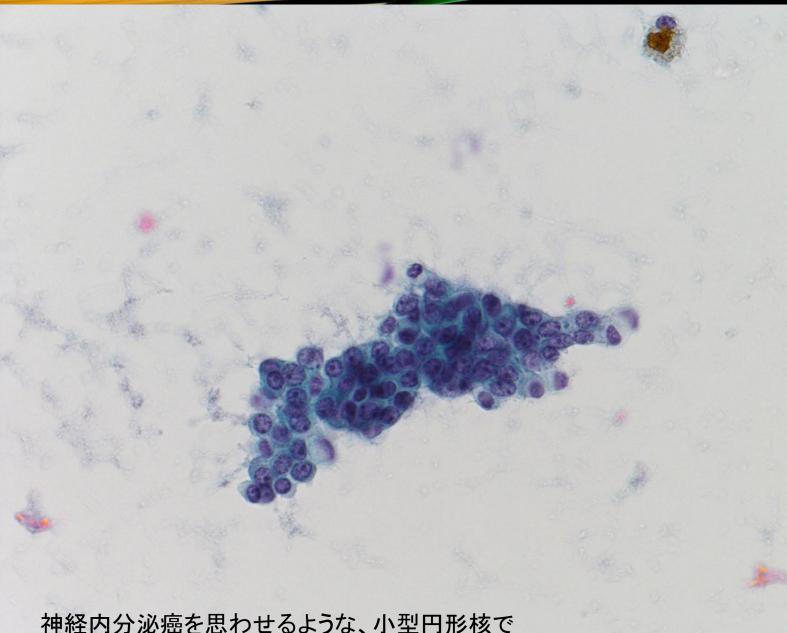
症例

- 年齡 性別: 70歳代、女性
- 材料: 左乳腺穿刺吸引細胞診 (再水和処理検体)
- 臨床情報: 左乳腺A領域に腫瘤非形成性病変を認める。

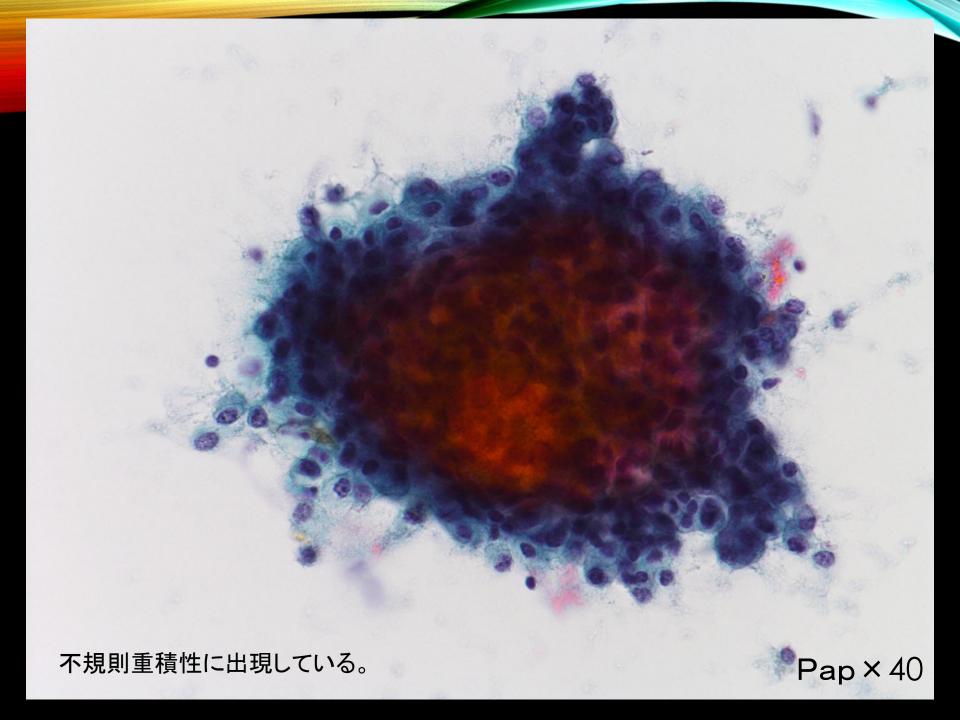


シート状に出現する細胞集塊を認める。 結合性は低下しており、周囲には弧在性に出現する細胞も見られる。





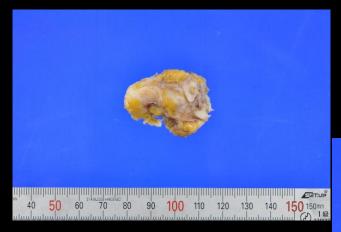
神経内分泌癌を思わせるような、小型円形核で細顆粒状のクロマチンパターンを示す。



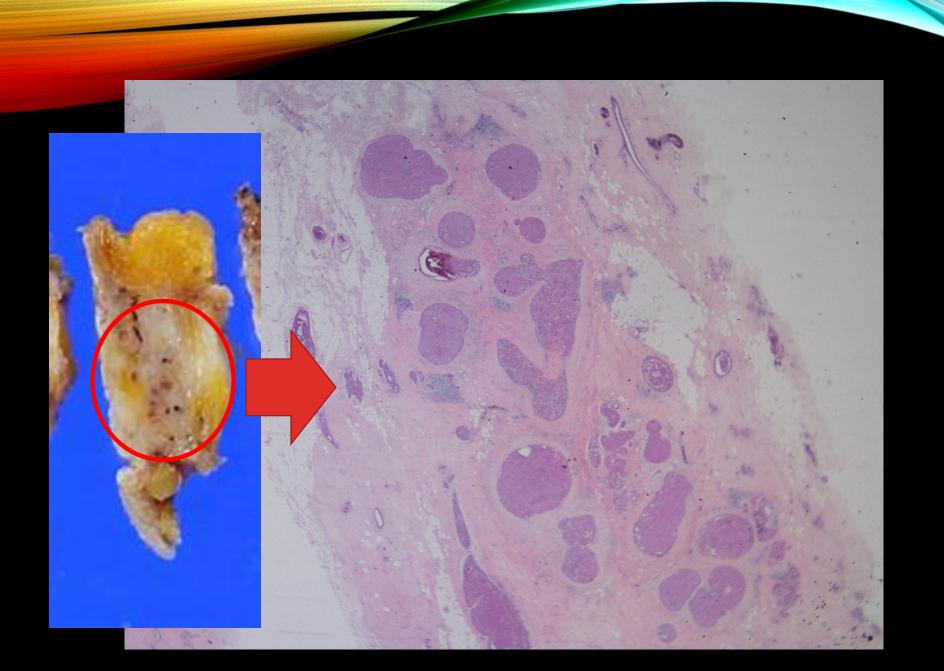
当院の診断

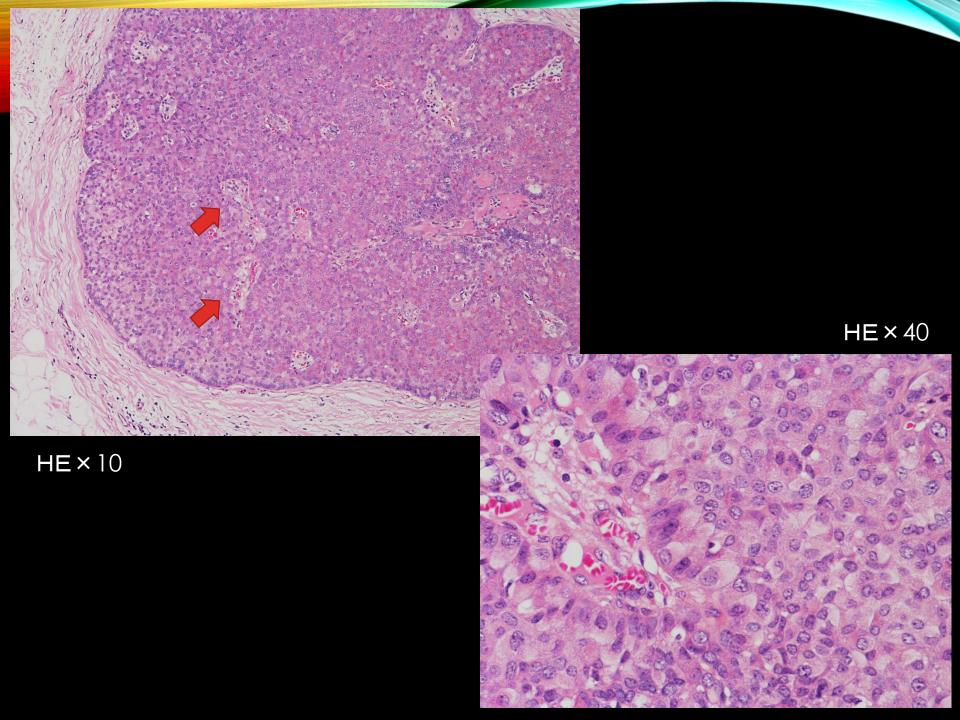
Suspicious (悪性の疑い)

病理組織

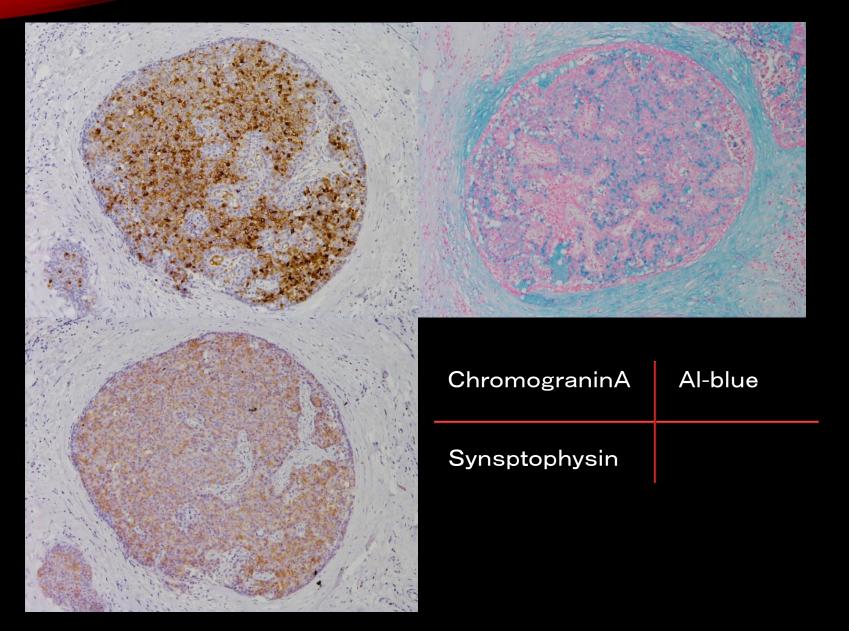








特殊染色



病理組織診断

Noninvasive carcinoma (Solid papillary carcinoma)

ER(+), PgR(+), HER-2(Score1)

Solid papillary carcinoma (以下SPC)とは

- 充実性乳頭状の発育形式を示すDCISの特殊亜型で、WHO第 4版では、Intraductal papillary lesions(乳頭状病変)のカテゴ リーのなかに独立した分類として記載されている。
- 特徴所見としてChromograninA、Synsptophysinなどの神経内分泌マーカーに陽性を示す。
- SPCには粘液産生がみられることが多く、SPCの一部は粘液癌の前駆病変とも考えられている。
- 免疫組織学的にはホルモン高感受性、HER-2陰性のLuminal Aに相当する。
- 臨床病理学的特徴は主訴の多くが血性乳頭分泌であること、高齢者に多く予後良好であることが挙げられている。

SPCの組織学的特徴

- 乳管内での乳頭状および充実性の上皮増殖
- ・ 血管周囲の偽ロゼット状配列
- 細胞質内外の粘液形成
- 核偏在した形質細胞様形態
- 好酸性、細顆粒状の細胞質
- ChromograninA等の神経内分泌系マーカー陽性
- 壊死は少なく核異型は比較的軽度
- 浸潤を時に伴う(神経内分泌癌、粘液癌)

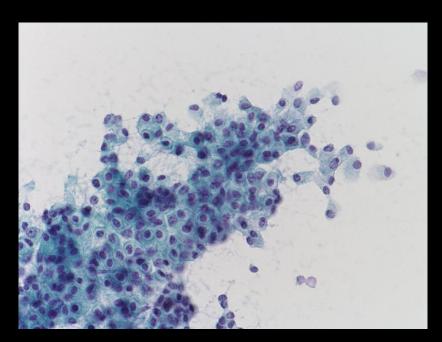
鑑別疾患

乳頭状細胞が出現 乳管内乳頭腫、乳頭型DCISなど…

弧在性細胞が出現 小葉癌、充実腺管癌など…

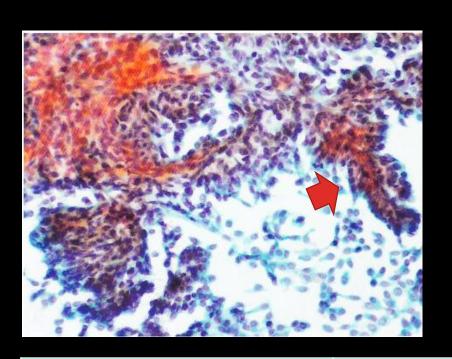
乳管内乳頭腫との鑑別

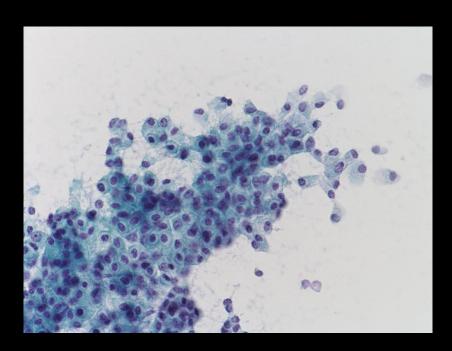




乳管内乳頭腫		SPC
あり(矢印)	筋上皮細胞	なし
なし	細胞質の好酸性顆粒	あり
クロマチンの増量なし	核所見	細顆粒状クロマチン

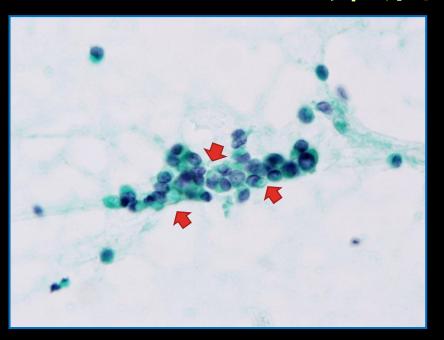
乳頭型DCISとの鑑別

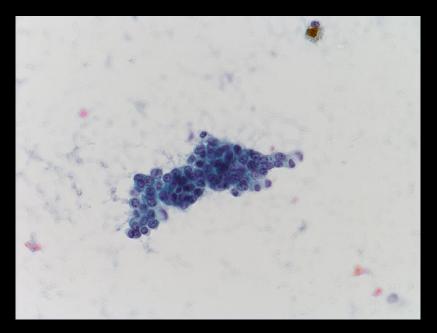




乳頭型DCIS		SPC
高円柱状、柵状配列	細胞配列	結合性のゆるいシート状 不規則重積
なし	細胞質の好酸性顆粒	あり

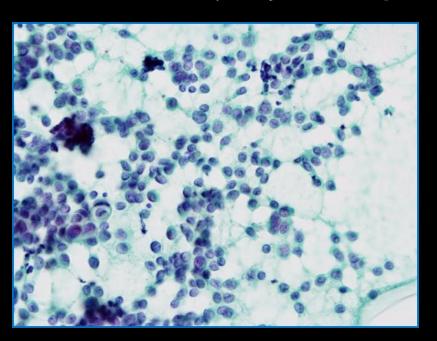
小葉癌との鑑別

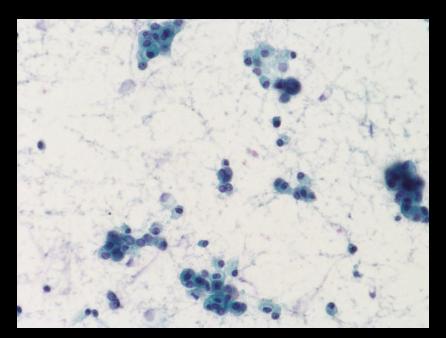




小葉癌		SPC
線状配列	細胞配列	結合性のゆるいシート状 不規則重積
多い	ICL	まれ
高度で多様性がある	核異型	軽度で均一

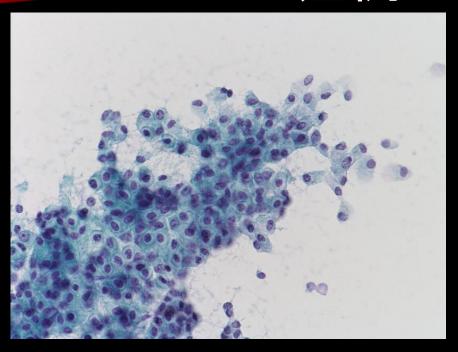
充実腺管癌との鑑別

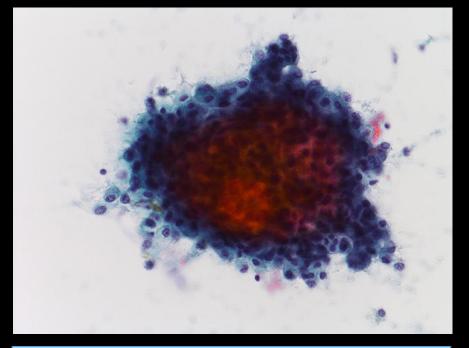


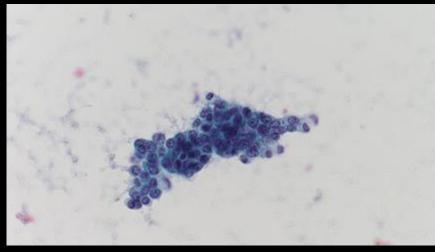


充実腺管癌		SPC
高度で多様性がある	核異型	軽度で均一
あり	核形不整	なし

症例の再検討







SPCの細胞学的特徴

- 大小の不規則重積性集塊
- 結合性の弱い孤立散在性細胞の出現
- 血管結合織を軸とする乳頭状集塊
- 筋上皮の付着は認めない
- 単調な出現パターン
- 異型は軽度で、核偏在傾向
- 好酸性顆粒状細胞質

再水和法について

- 固定前に検体が乾燥した場合は、再水和処理した後に 95%エタノール固定すると、細胞質・核の染色性が良好に なり判定しやすくなる。
- ただし、乾燥後アルコール固定した標本では、再水和処理 を行っても染色性の改善は望めない。
- ・塗抹後乾燥してから再水和処理を施す時間が早いほど、 良好な染色性が得られる。(遅くても2日以内に行う。)

手技

- 1. 未固定で乾燥した標本の上に生理食塩水を満載 し30秒~5分間置く。
- 2. 軽く水洗後、95%アルコールで30分以上固定し、 染色する。

(利点)

- 多くの細胞が回収できる。
- 標本作製の際に時間的余裕ができる。
- 背景の赤血球が溶血する。

(欠点)

- 細胞が膨化し、核所見が読みづらくなる。
- 細胞成分が少ない標本では効果が少ない。

まとめ

- SPCは異型が弱く、時として良悪の判断に迷うことがあるが、 細胞像の特徴を念頭においていれば診断は可能であると思われる。
- 再水和法は標本作製が容易で、より多くの細胞が回収できるが、細胞所見が通常のパパニコロウ染色と異なる点があるため、判定時は注意しなければならない。